

森鷗外『青年』論

―『椋鳥通信』と1910年代文学状況の関係を中心に―

文化創造専攻 国文学専修

二〇〇〇二AJM 倉田隼都

修士論文要旨

本論文は、雑誌「スバル」で連載された森鷗外の『青年』と鷗外が同じく「スバル」で連載していた『椋鳥通信』並びに『むく鳥電報』との関係性に注目し、『青年』の文中に見受けられる『椋鳥通信』の記事が『青年』の文章でどのような効果を発揮しているのかについて明らかにすることを主たる目的として執筆された。また、『椋鳥通信』や『青年』に現れる書き手としての鷗外の肉声に注目し、『椋鳥通信』の記事と『青年』の記事から同一内容のものを抜き出して考察しながら、『青年』を同時代の文化的状況との関連性を踏まえて読み直し、『青年』の文学史的再評価を目指している。

第一章では、『青年』連載前後の時代状況を考える上で重要な歴史的事件である大逆事件を取り上げ、当時日本社会で大きな権威を放っていた山県有朋と鷗外がどのように関わっていたのか、鷗外はどのよ

うにして、その権威に抵抗していたのかを考察する。また、一九一〇年代の日本を取り巻く自然主義について、文壇の声をとりあげながら鷗外は自然主義についてどのような方法で声をあげたのかを考察した上で第二章の論述につなげている。

第二章では、『青年』と『椋鳥通信』がどのように共鳴していたのかを考察する。先行研究では重要視されていない、『むく鳥電報』についても取り上げる。まず、「スバル」一九一〇年九月号の『青年』に描かれる「電信體」というキーワードが、同号『椋鳥通信』の中にも見られ、さらに『むく鳥電報』という新しい連載が始まることに注目したい。次いで「スバル」一九一〇年九月号に引用されているユイスマンスの『彼方』と「霊的自然主義」に注目し、純一と『彼方』の主人公であるデュルタルの類似点と差異を考察する。そして純一がなぜ、Y県から上京し目指した自然主義作家ではなく、「現在の流行とは少し方角を異にしている」、「伝説」を描くことになるのかについて純一の心理的経緯に焦点をあてながら明らかにしていく。

最後に、鷗外の肉声が表れている、『青年』と『椋鳥通信』の記事に注目し、鷗外が『青年』や『椋鳥通信』に込めた自然主義、または文学への姿勢を明らかにした。